

高松塚古墳墳丘の景観変遷（下）

著者	米田 文孝
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	66
ページ	6-7
発行年	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023870

高松塚古墳墳丘の景観変遷（下）

米田文孝

元禄期に続く享保・文化の陵改めも、先に比定された高松塚古墳を文武天皇陵とすることを踏襲したが、民間では中尾山古墳とする説(『大和志』『大和名所図絵])や、現陵の天武・持統陵古墳を檜前安古岡上陵とする説(『打墨縄』『首註陵墓一隅抄])などの異説もあった。このため、安政の陵改めでは、天武・持統陵古墳を檜隈安古岡上陵に、同じく五条野丸山古墳の後円部(畝傍陵墓参考地)を檜隈大内陵に改定した。この結果、高松塚古墳は文久期の修陵を受け改変されることなく、墳丘および周辺地形が保持されたのであろう(写真5)。

最終的に1881(明治14)年、文武天皇の檜隈安古岡上陵として、高松塚古墳の東南約200mに位置する栗原塚穴(ジョウセン塚)古墳が文武天皇陵として決定された。この改訂には前年、元は梅尾高山寺の所蔵であった『阿不幾乃山陵記』が個人所有となり、その詳細な記述内容を根拠に、檜隈大内陵が現在の天武・持統陵古墳と改訂されたことや、大和・山城の天皇陵の所在地の考証を行った谷森善臣の『山陵考(所



写真6 発掘調査前の高松塚古墳

在考証)』などが影響した。この間の経緯については、大澤清臣・大橋長喜による「天武天皇持統天皇檜隈大内陵所在考」、及び「文武天皇檜前安古上陵所在考」に詳しい。

これ以降、高松塚古墳とその周辺は国有地(雑種地)になったが、1931(昭和6)年には大蔵省大阪税務監督局が奈良県に売却を照会したこともあった。この時は県史蹟名勝天然記念物調査会委員佐藤小吉の調査報告により売却は免れ、1972(昭和47)年の発掘を迎えるまで、現状が保たれた。ただしこの間、国有地ではあるものの陵墓ではないために管理が及ばず、農業環境の変化により芝草が刈り取られないことなどから推定樹齢200年を超える松の大樹も何時しか枯死し、墳丘にはネズミモチや孟宗竹が繁茂する植生環境に変化した(写真6)。

1972年の発掘調査では墳丘に発掘区が設定され、極彩色の壁画が描かれた横口式石槨を内部主体とすることが確認された。高松塚古墳の築造後、石槨が人の目に触れるのは平安時代末から鎌倉時代にかけての時期と推定される盗掘以来のことであるが、その墳丘の姿は国外でも速報された(写真7)。発掘調査終了後には、墳丘の南側に石槨と壁画の保存施設が設けられた。

なお、現陵の文武天皇陵古墳について『陵墓地形集成』をみると、一辺45~60mの不整形な五角形に区画されている。南南東に面する拝所の奥には直径約15m、高さ約3.5mの円丘状の



写真5 幕末期の高松塚古墳(『陵御箇所』)



진흙으로 메운 入口 瓦棺塚의 墳丘 調査중의 高松塚古墳墳丘

写真7 調査中の高松塚古墳墳丘
(『韓国日報』1972年3月29日号)

高まりがあり、その背後（北側）には接するかのよう、急勾配の不整形な丘が横たわる。石田茂輔によると、この円丘は破壊された切石積横穴式石室を覆い築いたもので、不整形はこの切石積横穴式石室を内部主体とした古墳の墳丘残存部であると推定する。

一般的に、文久の修陵とよばれる事業は、宇都宮藩が幕府に差し出した「山陵修補の建白」に端を発して実施されたもので、その報告書ともいえる『文久山陵図』では、修陵以前の姿を描いた「荒撫」図（写真8）と、修陵による成果を描いた「成功」図（写真9）が描画されており資料的な価値が高い。文武陵については、両図とも内部主体である切石積横穴式石室の羨門部らしき石組が描画されており、石田茂輔の推測を補強する。

文久の修陵事業ではこのような陵墓の外形的な変化にとどまらず、朝命により幕府が設置した山陵奉行に始まる恒常的な管理と祭祀が行われるようになり、明治維新後は国家による陵墓管理体制が強化された。

この文久の修陵事業の経緯については、戸原純一・上田長生などの論攷に詳しいが、文武天皇陵古墳にみられる改変のみならず、多くの陵墓が大きく改変・整備されていることに留意する必要がある。これには1862（文久2）年、宇都宮藩家老であった戸田忠至（山陵奉行）が公武合体を背景に最高責任者として実施した畿内一円における陵墓巡検の結果、盗掘により内部主体である石室や石棺は露呈し、墳丘は耕作地として開墾されたり墓地として利用されたりするなど、言語に絶する荒廃の実態を目にし、あ



写真8 『文久山陵図』に描かれた文武陵(荒撫図)



写真9 『文久山陵図』に描かれた文武陵(成功図)

るべき本来の姿に整備することを目的としたため、大規模な改変に繋がった。

このように、高松塚古墳にみえてきた事例をはじめ、古墳墳丘の植生遷移をはじめとした景観は鎮守の森と同様、築造された地域や時代との関係において変遷しており、人々の古墳に対する意識を如実に映す鏡であることがわかる。

【引用・参考文献】

- 石田茂輔「文武天皇棺塚安古上陵」『国史大辞典』13 1992
- 上田長生『幕末維新期の陵墓と社会』思文閣出版 2012
- 小椋純一『森と草原の歴史』古今書院 2012
- 宮内庁書陵部陵墓課編『陵墓地形集成』学生社 1999
- 末永雅雄編『壁画古墳高松塚』奈良県教育委員会 1972
- 外池昇・西田孝司・山田邦和『文久山陵図』新人物往来社 2005
- 太政官記録局編（大澤清臣・大橋長喜）『山陵』『太政類典』第5編31巻第4類 1881
- 玉井什「元禄十⁷年山陵記録」『庁中漫録』第53巻 1717
- 戸原純一「幕末の修陵について」『書陵部紀要』16 宮内庁書陵部陵墓課 1964
- 奈良県高市郡役所編『奈良県高市郡志料』1915
- 奈良文化財研究所編『飛鳥・藤原京展』朝日新聞社 2002
- 広吉壽彦「明日香村高松塚の元禄調査」『青陵』20 檀原考古学研究所 1972
- 文化庁文化財部『月刊文化財』532号 第一法規 2008
- 文化庁ほか「平成18年度高松塚古墳墳丘の調査」パンフレット 2006

文学部教授